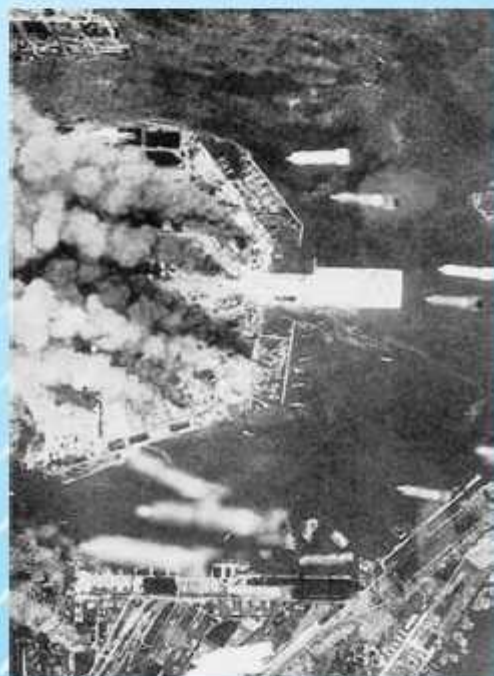


みなと物語



太平洋戦争

昭和16年(1941年)12月、「太平洋戦争」が勃発しました。当時、全国一の貨物港であった大阪港を有する港区は、海の玄関として発展してきましたが、戦争勃発とともに、軍事上の重要地区として、攻撃の焦点となりました。港区が初めて空襲による被害を受けたのは、昭和20年(1945年)1月19日でした。B29一機が大阪湾より侵入し、朝潮橋付近の市電道路側の民家に、爆弾19個を投下し、死傷者は



昭和20年、空襲下の大阪港
「大阪築港100年 上巻より」



焼死体を運ぶトラック 6月2日、
港区市立運動場付近(大阪国際平和センター提供)

100名余りにのぼりました。その後も

空襲は、1月31日入舟・福崎方面、3月13日夕風橋以東方面一帯、6月1日夕風橋以西方面一帯、15日市岡元町方面と続きました。特に、3月13日と6月1日の2回の大空襲

により、港区の88.6%が焦土と化し、全市22区中、浪速区とともに最も大きな被害を受けました。市立運動場(今の八幡屋公園)は港区内の遺体収容所となり、2000人以上の遺体が火葬されました。空襲などにより、多くの尊い人命が失われ、また区民が集団疎開をしたことなどもあって、港区の人口は、かつて海運景気でにぎわった太平洋戦争前と比べて、4分の1の9000人弱にまで減少しました。しかし、学童疎開によって、多くの子どもたちが被災を免れました。戦後、港区は「大阪市の復興は 港の復興から」をスローガンに、再建の道をすすんで行きます。



焼け野原になった市岡付近1945年3月(毎日新聞社提供)
写真中央右よりに市岡中学校(現在の市岡高校)、その左には市岡高等女学校(現在の港高校)の校舎が残っている。まさに一面の焼け野原だったことがうかがえる。